

# 神祭の日に

柳瀬川ひろし

印象のない夢を何度も何度も見ていた。そう思っていた。そのメロディーが実家からの呼び出し音だと理解できるまで。

電話に出ようと決心するまで、俺はどんな夢だったかを何としても思い出そうとしていた。

「圭介。どうしよう。お父ちゃんが倒れた」

「正月はあんなに元気やったやんか」

「外で薪を割りよって急に気分が悪い言うてねえ。救急車呼んだがよ。今は入院して容態は安定しちゅう、脳梗塞やと」

「危ないの？」

「命に別状はないと。けんど麻痺が残るらしいで。田んぼや畑はもう無理にかあらん」

「とりあえず次の土日に帰るよ。」

俺は電話を切っても、夢のことを考えていた。もしかしたら親父のことを知らせる正夢ではなかったのかと。

どうしても具体化できない夢の切れ端を捕まえようと布団の中で悶々としているうちに、俺は決心した。

役所はこの三月で退職だ。予定よりもかなり早まってしまったが、故郷に帰ろう。堂々たるUターンだ。弘美や娘たちも反対することはない。

退職金が少ないことが多少不安だったが、田舎暮らしはお金がかからない。住む部屋もある。軽トラックもある。米と野菜もある。米作りは俺がする。八十の親父が一人でやっていたことだ

。俺にだってできるはずだ。

明日役所に出たら、真っ先に部長に伝えよう。同僚は驚くことだろう。来年度の人事が気にかかり始めるこの時期、黙っていても噂は広がるかもしれない。俺は最近仲良くなった行きつけの喫茶店のウェイトレスのことが気にかかった。しかしこんな厄介を背負いこんでしまったのではどうすることもできない。

田舎に帰る決心がつくと、とたんにこのワンルームを離れることが、いや東京を離れることが寂しく思われた。そして五十を目前にして人生の大きな節目を迎えたという実感がじんわりと湧いてきた。なんだかんだ言っても学生生活を含めると三十年近くを過ごした東京だ。家庭生活がおかしくなってきたからの五年間は、この部屋が唯一心の落ち着く場所になっていた。

若い頃を懐かしがって真っ先に大好きだった女優の水着写真を壁に貼った。

若くして亡くなってしまった彼女は写真の中では全く色褪せることはない。小麦色の肌にピンクのビキニが眩しい。昨今は美白が売りなので、こんな小麦色はめったに見ない。どことなく若い頃の弘美を思い出させる笑顔がほろ苦い。

時計を見るとすでに午前三時を回っていた。

明日、仕事が終わったら喫茶店に行こう。田舎に帰ることを話せるかどうか自信はない。彼女が俺との将来について何かを期待しているとも思えない。

親子ほども年が離れているのだ。もしかしたら何も言えずに引っ越しの日を迎えるのかもしれない。それはそれで仕方のないことなのだろう。

娘たちにはそれぞれ伝えておこう、ぎくしゃくした夫婦関係の下で育った娘たちだ。祖父の介護という理由は彼女らを安心させることだろう。そうすれば弘美にもやがて伝わる。

「父倒れる」の知らせは、俺の動かしようのなかった日々の暮らしを、一瞬で動かし始めた。

定年近くまで勤めたら、後は両親の世話をするために一人で田舎に帰りのんびり暮らそうという計画は一夜にして現実のものとなったわけだ。

父の介護はまだ母に任せるとしても、父の代わりに米作りをするという労働介助は四月から始まる。おそらく定期的な通院もあることだろう。リハビリもまだ続いているかもしれない。車で送り迎えする仕事は免許を持たないおふくろにはできない。四月までに奇跡的な回復を見せてくれるかもしれないが、おそらく俺の務めとなるだろう。

こうして俺は四月から初めての米作りに取り組むことになった。それも戸数わずか十三件、住民のほとんどが七十歳以上という限界集落で。

「神事に使う縄は普通とは逆に捻らないかんがやき、こうやってよ、右の手の甲が手前に来るようにするがよ」

源さんは血管が膨れ上がり幾筋もの山脈をなした手で、ず、ず、ずうっと縄を縛った。

俺はすでにネットで何度も確認していたので源さんの手元はろくに見ず、いかにも経験があるという顔つきで藁を二束に分け利き手の平に載せると左手を上を被せて転がした。しかし、束にした藁は一回転もせず原型を留めていた。

俺は見られやしなかったかと冷や冷やししながら、けっこう固い藁やねえと源さんの手元に話しかけた。

「ほんならもうちょっと叩いてみるかえ」

俺は平気、平気と答えると源さんに見られないように束ねた一方を両手で捻り足の親指と人差し指で押さえ、もう一方も両手で捻って二本を絡まり合わせた。撚りを加えられた二本の藁束は、まるで自らに意思があるかのように撚り合わさって縄になった。

。

俺は安心して源さんに声をかけた。

「おんちゃん、こんなんでもいいですか」

「初めてにしちゃあ、ようできちゆうわえ。けんど、そりゃあ捻りが逆やねや」

「ええ？」

俺はまさかと思いながら源さんのと俺のとを比べた。

逆だ。なんでだ？右手は手前に転がせばいいはずだった。

確かに俺は右手を手前に引いたぞ。そこまで考えて実際に手を動かしてみた。

違う、何かが違う。ネットで見た縄作り名人の手元と。

そうだ、映像では手の甲が右手だった。しかし俺のやり方では左手の甲が上になっていた。

しまった、しくじった。

「練習やきええわや」

二メートルほどの長さになった縄を丸めながら、源さんはしわくちやの笑顔をよこした。

俺は平静を装って縄を解くと、源さんの視線を気にしながら、柔らかくなった二本の藁束を手の中で転がしてみた。今度は少し転がったが、藁はぼろぼろに千切れ捻り合う力は生み出せていなかった。

源さんはそんな俺には興味なさそうに二本目の縄をない始めた。

しくじった藁を丸めると、今度こそと気持ちを切り替えて新しい藁を手にとった。少し多めに霧吹きで水をかけた。源さんは端を留めるのも一本の藁を使って器用に縛っていた。だが俺にはその針金で締めちよきやと言ってくれた。見栄を張らずに素直に従っておいて正解だった。源さんのように藁を使っていたら、なう前から呆れられていたことだろう。針金で端を固く縛ると、もう一度二つに分けた藁の一方を手の向きを間違えないように集中しながら振ってみた。

が、藁は手の中で相変わらず強情な態度を崩さなかった。

源さんはそんな俺にはお構いなしに黙々とない続けていた。源さんが見ていないことを確認すると、また両手でゆっくり撚りを加えていった。このやり方だとうまく藁に撚りがかかる。五回ほど振ったところで、足の親指と人差し指の間にその束を挟み、撚りが戻らないようにした。

一回目よりも上手くできた。もう一方の藁束にも同じようにして撚りをかけた。

俺には撚りのかかった二本の藁束がそれぞれどのように絡み付くのかをじっくり見てやろうという心の余裕が生まれていた。自分の手で縄をなえそうな気がしてきたからかもしれない。

ネットで見たときは、まるで藁に命が吹き込まれたかのように互いが互いを求め合い、あっという間に絡み合っていた。果たして俺がやっても藁に命を吹き込むことができるのだろうか。

俺の心配をよそに藁は見事に絡み合った。

考えていたのは、左右反対の回転を与えられた藁どうしが、もとに戻ろうとして発生させる回転作用によって絡み合うというストーリーだ。それは世間でよく云われる正反対の性格を持つ男女の方が夫婦として案外うまくゆく的な話を連想させた。

しかし実際は違っていた。同じ回転を与えられたものどうしが固く絡み合うのだ。やはり似た者どうしの男女の方が強い絆で結ばれ、うまくやっていくことができるのだろうか。

ふと視線を感じて顔をあげると源さんが俺を見て笑っていた。

「おんちゃん、これどうですか」

「力があるきに、よう締まっちゅうねや」源さんは三本目に取りかかりながら満足そうに微笑んでいた。そう感じた。ここ二、三年は源さんと親父の二人でしめ縄を作っていた。おばあちゃんたちは皆心配していた。源さんが作れなくなったら神祭はどうするのかと。

親父が脳梗塞で倒れたのは正月が終わってすぐのことだった。八十を過ぎていた親父は十年ほど前から定期健診も受けずに米作りを続けていた。頑固な男のことなので、病院と些細なトラブルがあったのかもしれないし、十分に生きたからいつ死んでもよいと思ったのかも分からない。しかし、俺や母は若いときから頑強で病気知らずの親父のことを過信していた。病気になどかかるはずがないと。

気が付けばこの集落で米作りをしているのは、うちと源さんとこの二軒だけになっていた。しめ縄作りは二軒で受け持つしかない。

親父は退院したものの左手に麻痺が残っている。母は家事をこなすので精一杯の状態だ。

三人兄弟の中で自分だけがここに帰って来ることができる状況だった。

都内の区役所勤めも二十六年目になっていた。娘たちが成人するのをきっかけに家庭もそれぞれが独立することになった。そうなるような夫婦関係が常態化していたのだ。その結果、自分の判断で自分の進む道を決めることができた。

俺は四十を過ぎた頃からずっと家庭に違和感を抱いていた。その原因を今ならうまく表現できる気がする。しかし、仕事に追われ、家事や育児、子どもの教育方針、互いの両親との関わり方など、日常の様々な場面ですれ違いが生じ始めたにもかかわらず、俺は無口になるだけだった。そして、妻と話し合うことを避け、その精神的な辛さを抱え込んだまま内向していった。

妻がそんな俺のことを理解できるはずはなかった。職種は違っていても、夕飯のとき愚痴をこぼす彼女の様子から、まるで俺の考え方と同じではないかと思うことがしばしばあった。若い頃は嬉しかったそんな彼女の様子も、やがては指先のささくれのような嫌悪感に変わっていた。

俺はいつしか娘たちが独立した後の二人だけの暮らしを思い描くことができなくなっていた。

年老いた両親のことが気がかりだという理由は、予想していた通り早期退職やらUターン生活への言い訳としては素晴らしい説得力を發揮した。

ともあれ今年四月から生活が変わった。毎朝目覚めるとカラッと音が聞こえるほどに変わった。良かったのは人間関係から生じるストレスがないことだった。大きな課題は俺に米作りができるのかということ。

おまけに歩行型のトラクターしかないときている。作業は初体験ばかりで体はへとへとになった。それでも梅雨が明けた頃から少しずつ農作業に耐えられる体になってきた。

親父は田んぼはやらんでええぞと言った。米は買った方が安いきねやと。

「田んぼはどうぜよ。ようできたかえ」

すでに三本目を終えた源さんの声が俺を今に引き戻した。

「イノシシにだいぶやられましたけど、うちで食べる分はなんとかありました」

「そうかえ。困ったことがあったら何でも言いや。遠慮すなや」

俺は藁を継ぎ足しながらお礼を言った。源さんにしてみても既に七十の坂は越している。俺が一人前の米作り百姓になるためにも源さんにはまだまだ現役でいてほしい。

気が付くとなんとか二メートルばかりの縄ができていた。見るからにしよぼい。源さんの足下にはもう四本の縄があった。よく見ると源さんの縄もなぜかしよぼい。自信はなかったが声をかけた。

「おんちゃん、こんなんですぞか」

源さんはないかけの縄を丸めるとその場に置き、代わりにどこからかはさみを取り出すと俺の差し出した縄を受け取った。

産毛が生えたように飛び出した藁の繊維を、源さんは愛おしそうに切っている。

「できたで」

自分でも驚くほどちゃんとした縄に変身していた。はさみを使って化粧直しするとは考えもしなかった。手に取って実感した。俺にもやってゆけるかもしれないと。

源さんが一本の藁を差し出していた。針金で縛ったところをこれで縛り直せということだろう。藁で縛るのはもう簡単にできる気がした。藁を振り、ぎゅっと差し込んで飛び出した余分をはさみで切り取った。恐る恐る針金を解いた。源さんは笑っている。

生まれて初めて自分で稲を育てて収穫した。大変だったのは夏にかけての草取りだったろうか。稲の穂先が顔をちくちく刺す。汗が目に滲みる。抱えたヒエが重くて足がどろに沈み込んだ。畦に出すまでが一苦勞だった。

収穫時には手刈りした稲を束にして稲木にかけ天日に干した。その藁で、今、縄ができた。教科書で習った「わらぐつの中の神様」のことが頭に浮かんだ。藁靴は、藁を細い縄状にしてから作るのだろうか、それとも一本の藁から作るのだろうか。ここでは藁靴は必要ないが藁草履なら子どもの頃川で履いた記憶がある。自分の手業で物が作り出されることに何とも言えない喜びを感じていた。

「源さん、藁草履作れますか」

源さんのしわくちやの笑顔が揺れていた。

明日は神祭という土曜の早朝、俺は治子さんに起こされた。それも拳で叩く玄関のアルミ扉の、どこかくぐもった音で。

しかし、目覚めてから分かった。俺を目覚めさせたのはアルミ扉を叩く音ではなく、治子さんの土足で寝室まで上がり込んで来るような遠慮のない声のせいだった。

「ケーちゃん、明日は豊作さんでえ。聞いてないろう。あんたのお父ちゃん、はつきり言わんきねえ。」

「はい、何も言ってなかったです。ほんとですか」

「嘘言うてどうするで。おぼちゃんのこの格好見たら分かるやろ」

「豊作さん」というのはこの集落の神祭のことだ。俺が子どもの頃からそう呼ばれていた。

治子さんは、両手に風呂敷包みを二つ抱え、首には鍵の束を引っかけてチャラチャラいわせていた。

「今からお宮開けるき、ちょっとついて来てや」

治子さんは俺の返事も聞かずにアルミのドアを閉めた。俺は大慌てでジーパンをはき、そのまま外に飛び出した。

「治子さん、何か持ちましょうか」

俺はドアを大急ぎで開けると、治子さんの後ろ姿に向かって声をかけた。治子さんは振り返りもせず、ずんずん進んでいく。しばらくして、俺の問いに思い出したように手を振って答えた。

どうやら手伝い無用のようだ。

お宮に登る階段の手前でやっと追いついた俺は、四月からまだ一度もお参りに来ていないことに改めて驚かされた。全く余裕がなかったのだ。

階段を少し登ると一の鳥居。さらに登っていくと二の鳥居が建つ境内に出る。鳥居には風雨に晒され変色したしめ縄がまだへばり付いていた。

治子さんは威勢良く鈴を鳴らすと、大きな柏手を二つ打った。靴を脱いで上がったお堂の扉には錆で作ったような赤い弁当箱ほどもある錠前がかけられていた。治子さんは首にかけたチャラチャラから迷わず鍵を選ぶとそれを開けた。

黴の匂いが鼻孔をつうんと刺激する。人が住まなくなった部屋に入ったときに嗅ぐ特有な臭い。

扉をくぐろうとすると頭の上にもしめ縄があった。中は薄暗く、湿った空気で編んだカーテンが幾重にも引かれているようだった。

その空気を全く感じていないのは治子さんだ。さっさと部屋の戸を開け放って深呼吸をしている。

俺は治子さんに言われるがまま、テーブルや椅子を出し、さらに階上にある巨大な神棚のような空間に上がってお供え用の机やら台やらを出した。

治子さんは、風呂敷包みを降ろすと中から次々と奇妙なものを取り出した。カセットテープレコーダー、三角帽子、変装用のひげメガネ、サンタさんの衣装、浴衣、学生服、白衣、チャイナドレス、大きな耳の付いたカチューシャ、ちょんまげ付きのずら、蝶ネクタイ、毛糸の腹巻き、山高帽、ひよつとこやタイガーマスク、アトムのお面、それにピンクのビキニまでである。そして、それらを壁に次々と飾っていった。

「あんだ、ええしめ縄作ったとねえ」

ニコニコしながら治子さんが俺の背中をどついた。

「源さんが言いよったで、ケーちゃんはずじがええいうてねえ」

「そうですか。あんなんで役に立ちましたか」

「あんだが戻ってきてくれただけで、どれだけ心強いかな、あんだ、分からんやろ」

語気を強めた治子さんは、決して怒ってはいなかった。

「明日、どれ着るか決めちよきよ。まあ決めちよつても、はし拳勝負やけんど」

ハーツハツハツハツと豪快に笑うと治子さんは棚に置いてあった雑巾で床を拭き始めた。

「ケーちゃんなあ、しめ縄、どこにどんだけ付いちゅうかよう見ちよきや。それから場所によって長さも違うきねえ。しめ縄のことは永久に任せたき」

手際よく拭き掃除を終えた治子さんは折りたたみ式の長テーブルの脚を出すと、俺の方を向き顎をしゃくった。手伝えということ

らしい。天板を持つと呼吸をそろえてひっくり返した。

もう一脚の長テーブルも脚を出し、治子さんが指示を出す位置に置いた。神棚に向かって縦に二脚のテーブルが並んだ。

「去年は英さんがみてたき、パイプ椅子は十五でえいねえ」

治子さんが寂しそうにつぶやいた。

俺は最近の英さんのことは分からなかった。歳はまだ七十代だったと思う。しかし、細くて筋肉質の体はどんな農作業も軽々とこなす優秀な農業従事者を連想させた、耕運機に乗って田から田へ移動する姿はいつも背筋がぴんっと伸ばされていた。それは、この集落の景色の一つとして、いつまでも存在するものと思い込んでいた。

治子さんが心なしか項垂れてパイプ椅子を一脚、しまってた場所に戻した。

「治子さん、自分の分はありますよね」

治子さんは無言のまま口を大きく開けて手を打った。

一瞬にして治子さんの顔が輝いた。椅子を取りに行く治子さんは、嬉しくてたまらない子どものようだった。俺はなんだかとても温かい気持ちになった。

テーブルと椅子の並んだこの部屋はあっという間に会議室のように様子を変えた。

「あんたが子どもの頃は、床に座布団で座りよったけど、みんなあ膝が痛い言うてねえ」

何十年も前の豊作さんの様子が写真パネルになって飾られている。一番新しい写真でも、すでに二十年の月日が経っていた。

「神様へのお供えは明日、太夫さんと一緒にするき、今日はこればあにしちよう」

治子さんは持ってきた荷物をすべて出し終わると俺を誘って外に出た。

「治子さん、今のは何という部屋ですか。拝殿ですかねえ」

「お参りもするし、宴会もするし、公民館ができるまでは寄合にも使いよったきねえ、考えたこともないわ」

「食べ物や飲み物はどうするんですか」

「今年は、義孝さんところが当番やきスーパーに頼んじゅう。なんちゃあ持ってこんでええで」

拭き掃除は一週間くらい前にスマレ会という女性の会で済ませてあったらしい。

米作りが盛んだった頃は、しめ縄作りも当番制だったそう。しめ縄作りが当番から外れ、それを俺がずっと続けるという事実が、小さな集落を動かす大きな歯車の一つになったんだという喜びのような諦めのような複雑な想いを俺に抱かせた。

治子さんは、社に鍵をかけると明日はよろしくと言い残して帰っていった。

翌日、俺は昼前からそわそわしていた。

朝早くお袋が豊作さんの心配をして俺の部屋にやってきたが、俺が出るからと伝えると本当にほっとしたような顔をして戻っていった。しばらくすると「おとうちゃん、圭介が出てくれると」と言う明るい声が聞こえてきた。

俺は、この集落でついに親父の代わりに勤めることになったのだという思いで複雑な気分になっていた。源さんとともに縄をなうことを決心したことが大きなきっかけになったことは確かだった。

十二時には軽く服装を整えて神社の階段下に立っていた。

真っ先にやって来たのはやはり治子さんだった。

治子さんは挨拶もそこそこに、「ケーちゃん、もうすぐ太夫さんが来るき、ざっと階段を掃いちよいてや。うちは中を片付けるき」と言っただけで慌ただしく階段を駆け登って行った。

それから三十分くらいの中に集落の面々が集まって来た。もちろん太夫さんも、ご馳走も到着し、神祭の準備は整った。

神妙な顔付きでパイプ椅子に座る人々は一応に老人と呼んでよさそうな容姿、身のこなしだった。

太夫さんは、ころ合いを見て祝詞をあげ始めた。しかし、俺はどこかで見たことのある太夫だなということばかり考えていた。

太夫さんが祝詞の合間に咳払いをしたとたん、それがスーパーの魚屋で白い帽子を被って刺身を切っているおじさんであることに気付いた。どうやら太夫自らがバイクに乗り、注文したご馳走を運んできたらしい。

俺は笑いをこらえるため、昨日治子さんが宴会のため壁にかけた仮装用の品々を眺めていた。ピンクのビキニを見ながら「これを治子さんが着ることになったら」と想像し吹き出しそうになった。

席についているお年寄たちの顔を見ながら、頭の中で衣装を着させて楽しんでいると、いつの間にか太夫さんの仕事は終わっていた。

「今日はアオリイカとボラを入れちよいたきねえ」

太夫さんの顔は魚屋のおんちゃんの顔に戻っていた。

「ほんなら」

ひときわ大きな声のてっちゃんがビールを高々と上げた。一斉につがれたビール越しにキラキラした笑顔が境内に反射した。皆十歳は若返ったように見えた。

お酒が呑めない太夫さんは、ご馳走を遠慮なく頬張りさっさと帰っていった。

階段下まで送っていった良枝さんは戻ってくるなり、口に手を当てて怒鳴った。

「神様が帰ったき仮装するでえ」

太夫は神様じゃないだろうとつつこみながら彼女の堂々たる態度に唸った。

良枝さんはまだ六十手前でここでは若手だが、年寄たちに怯む様子はない。

突然、良枝さんと目が合った。

「圭介さんは、長老と箸拳して何着るか決めてもろうてや」

長老とはどうやら源さんと向かい合って上座に座っていた八郎さんのことのようにだ。

良枝さんに赤い箸を三本持たされた。箸拳はこの地方に昔からあるお座敷遊びだ。互いに見えないように差し出した箸の合計を当てる遊びだ。俺は、源さんが手招きする長老の向かいの席に移動して座った。

「久しぶりの新入りやねや。箸を持つ手が震えるぜよ」

長老は多分そう言った。入歯が合っていないのか聞き取りづらい。ギャラリーが俺の後ろにずらりっと並んだ。

「年上の先手です。文句ないねえ。三本勝負は長すぎるき一本で決めます。いいですか、圭介さん」

「ケーちゃん、気張りや」

治子さんの声が聞こえたものの、年寄たちに囃し立てられ気が付くと三本握ったまま右手を突き出していた。一瞬座は静まり返り、長老が虚空を見つめて息をのんだ。そして、徐に右手を突き出した。

「さんぼおおおん」

そう言いながら、長老はすでに自分の右手に一本もないことを

見せてガッツポーズをしていた。

拍手喝采の渦の中、俺は完全に今を遮断し逆回しで情景を思い返していた。

長老が虚空を見つめたとき、俺の後方では何人もの年寄が、俺の左手に一本も残っていないことを盗み見て長老に「三本」の合図を送っていたのだろう。

俺は観念して壁を指さした。

「サンタクロースにします」

年寄たちは全員首を横に振り、さらに両手までも横に振って「拒否」のポーズを決めた。

「決めるがは勝った方ぜよ。長老、何にする？」

俺は背筋が冷たくなるのを感じた。

「そらあ、やっぱりピンクやろう」

多分長老はそう言った。俺は素早く壁中に視線を走らせ、ピンクの品物を物色した。だが、すでに分かっていた。ピンクはビキニしかないことが・・・。

「今日は涼しいき、上着はひっかけちよつてもええわや」

救いの声も、本当の意味での救いにはなっていなかった。

「ケーちゃん、悪いねえ。そらあ、うちの若いときの水着で」

ちっとも悪がっていない治子さんがさらに俺を鞭打った。

その後は、それぞれが箸拳勝負で衣装を決め、席に付き直した。

「それでは、三分ほど着替えの時間を取ります」

役場に再雇用で勤めている健さんがいつの間に出してきたのか小太鼓を打ち鳴らし始めた。

俺は、ピンクの水着を持つと外に出た。問題はトップではない。ボトムだ。トランクスをはいたまま足を入れ引き上げたが、すぐにこれ以上は上がらないところまで来た。なんとかあった。「やれやれ」と声に出してみた。「まあいいか」とも言ってみた。中に入ると、誰が誰やら分からなくなっていた。俺は少しだけほっとした。

「それではこれより豊作さんを始めます」

会計担当の英さんが高らかに宣言し、呑めや呑めやの祭りが始まった。

俺は破れかぶれで呑みまくった。何人かがしめ縄のことを褒めてくれた。俺は正直嬉しかった。源さんは草鞋作りを教えちやるき、うちの仕事場へ来いやと言ってくれた。

初めて話をするじいちゃんたちも、俺が子どもの頃は皆好青年だったことを再確認した。そう思って顔をよく見ていると昔の様子が目に浮かんできた。

結局知らなかったのはお嫁に来たおばちゃんと婿養子のおんちゃんだけだった。久しぶりにいやなことは一つも考えずに呑んだ。真昼間からこんなに呑んだことはないかもしれない。呂律もあやしくなってきた頃、社の外で俺を呼ぶ声が聞こえた。

それは、よく通る母の声だった。何を言っているのかは分からなかった。

俺はよろめきながら入口まで伝い歩きをし、鈴の付いた赤茶けた布きれにつかまって背筋を伸ばした。

ガラガラという鈴の音が境内に鳴り響いた。神様に気付かれてしまった。この情けなく不謹慎な姿を。

「圭介、ひろみさんが来ちゅうぞね。」

酔っているせいで戸惑い気味のおふくろの声がなぜなのか分からなかった。

ひろみってだれだ。

俺は知りうる限りの「ひろみ」を酔っぱらった頭の中に思い浮かべた。そして、おふくろの隣に立つ中年女性を見た。

「あなた！」

「ひろみ」と紹介された彼女は、俺が長い間見たこともなかった素敵な笑顔を見せて笑っていた。

そうだ、その笑顔には確かに見覚えがある。それは俺が大好きだった頃の「ひろみ」の笑顔にそっくりだった。